現地通信

ラングーンを訪ねて

石 井 米 雄

東南アジア研究センターの「ビルマ・タイ地域調査計画」の一環として、1966年5月からバンコクに滞在して調査を進めているわたくしは、昨年11月5日から12日までの7日間、ビルマの首府ラングーンを訪れる機会を得た。以下はその短い旅行のメモである。

1

タイ国をとりまく国々が、ビルマ、ラオス、カンボジア、マレイシアの4カ国であることは、だれでも知っている。しかし、たとえば、バンコクからこれらの国々の首府、つまりラングーン、ヴィエンチャン、ブノンペン、クアラルンプールへ自動車で旅行するにはどうすればよいか、という設問に答えられる人は意外とすくないように思われる。

この4つの首都のなかで、バンコクからもっとも近いのはヴィエンチャンである。10年前には、うねうねと続くコーラート高原の悪路が旅人の心の重荷であったが、1957年に竣工した、いわゆる「フレンドシップ・ハイウェイ」とその延長工事の完成は、この両都市の距離を乗用車でわずか1日の行程へと縮めてしまった。

マライ半島ぞいの道路に東北タイほどの目覚しい変化が見られないというのは、やはりこのふたつの地域の戦略的価値の相異によるのだろうか。クラ地峡の東端、チュンポン以南の道路がいぜんとして改善されていないので、陸路でクアラルンプールへ旅行しようとすれば、チュンポンから西折していったんインド海岸に出、それからラノン、タクアパを通ってパンガーまで南下し、さらに進路を東南にとってハジャイへ抜け、ここからサダオ経由でマレイシア入りをするとい

う, 昔からのコースをとらなければなるまい。優に 2 泊 3 日はかかる。

カンボジアのプノンペンへの自動車旅行は、つい先 頃までは、バンコク居住者の連休ドライブに最適のコースだった。すくなくともアンコール詣での起点をバンコクにとるということは、観光客の常識として通っていた。ところが先年タイとカンボジアとが断交して以来、両国間の交通はにわかに不便となり、昨年の7月22日からはアランヤプラテート・ポイペット間の国境が完全に閉鎖されて、それまでは特例として認められていた第3国人の出入国も、一切できなくなってしまった。

ラングーンとなると条件はさらに悪くなる。大ざっぱな地図で見ると、バンコクからラングーンへ入るには3つのコースが可能のように思われる。第1にバンコクからカンチャナブリを経由してモールメン、ペグー、ラングーンへと向うコース。このコースは、しかし、カンチャナブリから先の道が通れないので問題にならない。そのつぎはバンコクから中部タイの要衝タークまで北上し、そこから西行してメーソート経由モールメンに抜けるコース。このコースもタイ・ビルマ国境のメーソートで行き止りである。最後の、そして物理的に可能なただひとつの道筋は、北タイのチェンライからメーサイを通ってビルマ領に入り、ケントウンからシャン高原を西に進んで中央平原に達するとい



写真1 ラングーン名所のひとつ シュエダゴンパゴダ

う大迂回路である。ところが、この唯一のルートも、シャン州の治安状況の関係で外国人の通過は認められていない。この道だけではない。たとえ勇敢な探険家が、ジャングルの小径をたどってビルマ国境へたどりついたとしても、所詮かれの入国は認められないのである。なぜなら、ビルマへの入国査証には「陸路による入国は認めない」というただし書きがついているからだ。

こうしてみると、同じタイの隣邦といっても、その accessibility には大変な差があることがわかる。 な かでもタイとビルマとの距離がいちばん大きい。 航空 機を利用する以外に、つまりドンムアンとミンガラドンというふたつの空港を空で結ぶ以外に、タイからビルマへ入る道はないのだ。

こうした事情もあって、かつて数年をバンコクに過し、機会あるごとに近隣諸国への自動車旅行を試みたわたくしも、ついに今日までビルマを訪れることがなかった。東南アジア研究センターから、ビルマの現状視察のためラングーンへ出張するようにとの連絡をうけたとき、わたくしは、久しく訪ねのこした未知の国をおとずれる喜びに胸をふくらませ、いそいそと入国の準備にとりかかった。

2

11月5日の夕方,バンコクのドンムアン空港を飛び 立った UBA 機は、機首を西北に向けて快適な飛行を つづけていた。直線的な水路が幾何学的に交叉する低 湿な中央大平原をとび越えてデルタの周辺部に達する と、大地はしだいに乾きを増し、そこここにゆるい起 伏が始まる。気まぐれに大地をえぐって流れたホェイ の跡。その間を縫うように牛車道がうねうねと走る。 やがて大地の赤褐色はかげをひそめ、巨大な芋虫の背 のように波うつジャングルの緑がすべてを覆いつくし てしまう。視界いっぱいにひろがる緑の大海。わたく しは無限に続く森の中にひとりとりのこされた自分の 姿を想像して身ぶるいする。これだったのか、数百年 もの間このふたつの国の交流をさまたげてきた自然の 大障壁は。1700km もの国境を共有しながら、ビルマ とタイとは、このジャングルのぶ厚い壁のわずかの裂 け目を通って、時折押寄せて来ては、また戦利品を肩 に引上げて行く、あの遠征軍のもたらす唐突な接触以 外に、これといった接触を経験することができなかっ たのだ。

あたりはすっかり暗くなった。やがて左手に灯が見 えて来る。ペグーだろうか。そう思う間もなく、機は 高度を下げ始めた。

これからビルマを旅行される方のために、ここですこし具体的なことを書きとめておきたい。 空港に検疫、入管、税関という3つの関門があるのはどこの国でも同じだが、ミンガラドン空港の入管では、旅券に入国の証印を押捺されるほかに、「滞在許可証」が別途交付される点がちょっとかわっている。私の査証には7日間の滞在を認めるとあったが、入国審査官は、滞在の延長を希望するときはあとでその旨申請すれば可能である、と親切に教えてくれた。

税関は公用旅券所持者に対してはほとんどフリーパスに近い。 しかし 持込み外貨の申告は きわめて厳重で、これをきちんとしておかないと出国の際トラブルを起すもとになると注意された。ここで交付された持込外貨申告書の写しは、持込んだ外貨を現地通貨に換金したり、そのまま使用したりするとき、いちいち証印を受ける必要がある。ビルマ通貨の持込みは一切認められない。カメラ、ラジオなども申告をもとめられた。

旅行客にとって、ラングーンでなによりも不自由するのは乗物である。バンコクなどでは簡単につかまるタクシーも、ここではよほど幸運でないかぎりおいそれとは見つからない。近距離の交通には *サイカー と呼ばれる 「輪タク」が便利だが、ちょっと遠いともう利用できない。

外国人の泊るホテルと言えば、ラングーン河沿いの ストランド通りにある Strand Hotel か、郊外のイ



写真2 ストランドホテル通用口



写真3 インヤレークホテル

ンヤレーク湖畔にある Inya Lake Hotel の 2 カ所にかぎられている。わたくしは街中へ出かける便を考えて Strand Hotel へ泊った。 このホテルの脇には旧式のプリマスが常時駐車しているので,タクシー探しをあきらめて以来,しばしばこれを利用した。ただしこの車は, もっぱら 観光客目あて のハイヤーなので, すべて 時間制なのが 中距離の 利用には都合が悪い。最初の 1 時間が 10kyat, 2 時間目が 8 kyat,あとは 1 時間増す毎に 7 kyat というのが協定値段である。

Strand Hotel はさすが老舗だけあってボーイの訓練がよく行きとどいていて気持がいい。エアコン付きのシングル・ルームが朝食共で米貨11ドル50セント。1ドルは4.7kyat だが、支払は指定外貨以外では認められない。ビルマのホテルで英語が通川するのは当然だが、日本語を解する職員の多いのにちょっと驚いた。細かいことだがラングーン市内の電圧220Vである。

3

今回のわたくしの訪緬の目的は、できるだけ多くのビルマ人研究者に会って、ビルマ人自身によるビルマ研究の現状について話を聞くことであった。ビルマが現在、一種の「鎖国」状態にあって、外国人との接触をあまり好まないということは出発以前からいろいろと耳にしていた。こういう状況では正面からアプローチする正攻法がもっとも無難であろうと考えたので、まず大使をお訪ねして、御助力を仰ぐことにした。「全面的に協力しよう」という高瀬大使のお言葉で、わたくしは百万の味方を得た思いがしたものである。事

実,もし大使の理解ある御協力と,在ビルマ日本国大 使館館員各位とくに田中義具書記官の周到なアレンジ メントがなかったならば,7日間の滞在もまったく為 すところなく終ってしまったに違いない。この機会に 心よりお礼を申しのべる次第である。

さて訪問の順序として、まず文化省と教育省を訪問してはどうかという田中書記官の御意見にしたがって、最初に文化次官補と教育次官補に表敬することにした。文化次官補の U Thein Dan はわたくしを快く迎え、文化省の管轄下にある研究機関について手ぎわのよいブリーフィングをしてくれた。ここで得た情報にもとづいて、 Archaeological Department, Burma Historical Commission, National Library, National Museum を訪問することに決めた。

文化次官補訪問のあと, すぐに教育省をたずね, 次 官補の U Hla Saung に挨拶する。 ここでは元ラン グーン大学の教育学部長で、現在教育計画を担当して いるという U Ba Min が同席して、ビルマの新高等 教育制度について説明してくれた。わたくしは彼の話 で、 はじめてラングーン 大学という大学が すでに正 式には存在していないという事実を知った。 U Ba Min によれば、ビルマの高等教育は、1964年「社会 主義理念にもとづく高等教育の改革にかんするセミナ ー」の結果制定公布された「大学教育法」(Law No. 9 of 1964 of the Revolutionary Council) によっ て面目を一新することになったという。この改革は, 既存の高等教育機関を細分して、 17の universities & professional institutes へと再編成し、 これを すべて University Administration (Director: Dr. Nyi Nyi 文部次官)の管理下におこうとするも のである。その結果、ラングーン大学は RASU と略 称されるラングーン文理大学と、経済大学、教育大学

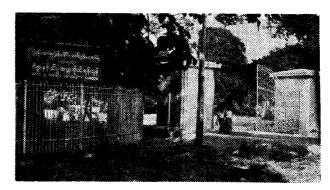


写真4 ラングーン文理大学正門



写真5 経 済 大 学

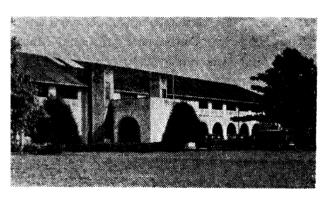


写真6 教 育 大 学

その他の単科大学にわかれることとなった。新学制にもとづく大学の主なものをつぎに掲げておく。

Rangoon Arts & Science University (RASU) Mandalay Arts & Science University (MASU)

Institute of Education, Rangoon

Institute of Economics, Rangoon

Institute of Medicine (1), Rangoon

Institute of Medicine (2), Rangoon

Rangoon Institute of Technology

Institute of Veterinary Science & Animal Husbandry, Insein

Worker's College, Rangoon

Institute of Agriculture, Mandalay

Institute of Medicine, Mandalay

さて東南アジア研究センターのこれまでの動向から見て、最初にわたくしの関心をそそったのは、この国における人類学研究の現状である。人類学といえば、どうしても、いわゆる「少数民族」の研究が問題となりやすい。わたくしは文化省考古学局の訪問から、ビルマにおける諸民族の人類学的研究が、考古学局の下部機構である Ancient Culture & Literature 所属

の文化官の手によって進められていることを知った。この Ancient Culture & Literature という機関は、Burmese、Mon、Indigenous という3部門に分れ、それぞれに Senior Culture Officer がおかれているが、Burmese、Mon、以外の民族を対象とするIndigenous Division は、その対象の性質上人類学者が Culture Officer に就任している。 現在の「諸民族担当文化官」は旧 Rangoon 大学人類学科出身の U Min Naing である。U Min Naing はすでに「ビルマ諸民族誌」などビルマ語のモノグラフ6冊を世に送っている学究で、現在はさきにカレン州の Pa An と Pa Pawn の2カ所で実施したカレン族の現地調査の結果をまとめているとのことだった。 なお Ancient Culture & Literature のある Culture House は No. 1、Church Road にある。

ビルマの人類学研究のもつひとつの流れは RASU の Dept. of Anthropology である。この学科は主任 教授の Daw Khin Khin Oo (M.A., Chicago) の下 に 9 人の teaching staff を擁している。現在 RASU では Anthropology は Psychology, History, Philosophy などを major とする学生が minor として 履習している。Daw Khin Khin Oo は,最近では大学院にのこった小数民族出身の学生で,自分の民族の人類学的研究を行なおうとする者が出て来たことは喜ばしい傾向だと語っていた。

ラングーン郊外の Kaba-Aye にある「国際高等仏教研究所 (International Institute of Advanced Buddhistic Studies) は、 先年京大からも研究者が留学したこともある著名な研究機関であるので、やはり大使館を通じてアポイントメントをとってもらって訪問することにした。この研究所は、世界仏教徒会議

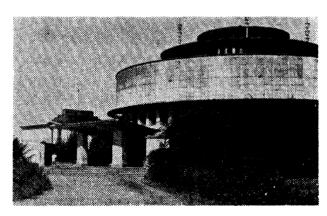


写真7 国際高等仏教研究所

の開催でわが国にも知られた World Peace Pagoda の裏側にある。ビルマの寺院では、境内に入る前にか ならず裸足になる習慣が厳重に守られているという話 は前から聞いて知っていた。 わたくしも今度 Shwe Dagon Pagoda におまいりしたとき、 連れの運転手 から靴下も脱ぐようにと注意されたことをおぼえてい る。しかし在家の機関であるこの研究所でパゴダと同 じように、玄関で脱靴をもとめられたのにはちょっと 意外な感じを受けた。ここには各国版の三蔵経、各国 から寄贈された各種の仏像が安置されており、また瞑 想の修法が行じられる神聖な場所であるからなのであ ろうか。わたくしは Saw Htun Hmat Win という シャン人の研究部長に案内されて所内を一巡した。こ の人は Harvard 大学出身の宗教学者である。ひとと おりの見学を終えてから、別棟で所長と会うことにな った。 現在の所長は U Hpe Aung という哲学者で ある。U Hpe Aung によれば、この研究所は在俗の 信徒の立場から Theravada 仏教を研究しようとす る機関であって、その点で僧伽とは一義的な関係をも たぬ点に特徴があり、研究者もかならずしも僧籍に入 った経験をもたないとのことだった。この会談中、わ たくしの隣りでさかんにメモをとっている人がいたの で理由をたずねたところ、外国人との会談はすべて管 轄官庁へ報告することになっているのだと説明され、 もしや失言がなかったかと冷汗をかく思いがした。

RASU ではさきに述べた Dept. of Anthropology のほかに Dept. of History を訪問した。 ここの teaching staff は 6 人で,内訳は西洋史 2 ,ビルマ史 2 ,中国史 1 ,日本史 1 。このうち 4 人までが女性 である。研究活動がかならずしも大学で盛んと言えないというのは,教育に重点をおくこの国の大学の性格 から見れば当然のことかも知れない。したがってビルマ史の研究者をもとめようとすれば RASU よりはむしろ Burma Historical Commission をたずねなければなるまい。

Burma Historical Commission の活動は,不定期刊の紀要 *Bulletin of the Burma Historical Commission* の刊行で広く海外にも知られている。その研究室は大学構内の Mandalay Hall にある。つい最近のことだが, Chairman の Dr. Kyau Thet がその職をひいたので, 現在は RASU Library の U Thein Han が代理をつとめている。前に文化次官補

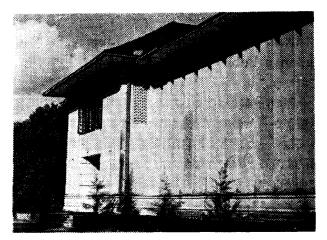


写真8 大学図書館

から、この委員会が、従来の王朝史偏重の歴史でない 民衆の生活史の解明に力点をおいた新しいビルマ史の 編纂に従事している という 話をきいたが、 ここでは Col. Ba Shin, Dr. Gyi Gyi, Daw Kyan という 3 人の full-time senior researcher が、 compiler となり、これを 3 人の junior researcher が補佐し て歴史編纂が進められている。

ここまで来たついでに、 U Thein Han の案内で Burma Research Society を訪れた。 BRS の事務 所は University Library の中にある。 専任の職員 がいないのか office はしまっていた。U Thein Han によれば、ここでは JBRS の1948年以後のバックナンバーが大てい入手できるほか BRS の50周年記念 号、Burma Pamphlets、Mon Texts、Text Publications: New Series なども在庫があるとのことだった。

わたくしのタイでの仕事がもっぱら National Library で行なわれている関係上, ビルマの National Library も一度見ておくことにした。ここの Librarian は Daw Nyunt Myint という日本語の非常に達者な女性である。きけばラングーンの Institute of Foreign Languages に通って日本語を学習しているのだそうだ。 この Institute には国際学友会の日本語教授のベテランである川原崎幹夫氏夫妻がコロンボプラン専門家として赴任して、日本語講座を開講している。 Daw Nyunt Myint にはそんな訳で大変お世話になった。この Library は蔵書70,000冊というから決して大図書館ではないが、刊本のほかよく整理された写本室を有しているので、原史料について研究を進めようとする向の必ず訪ねなければならぬ場所であ

ろう。

図書館ではこのほか RASU の Library, Sarapay Beikman Public Library などがあることを附記しておこう。

今回の訪緬はわたくしにとって初旅でありまた時間 も短かかったので訪問先もかなり制約されたものとなってしまった。とくに自然科学系の研究機関はどこも 訪問することができなかったことを残念に思う。そこで今後の参考までに主な研究機関について知り得た範囲のデータを書いておきたい。

1. Agricultural Research Institute, Gyogon, Insein

Chief: Dr. Kaung Zan

Division of Mycology: Dr. Kaung Zan

Division of Entomology: U Poo Nyo

Division of Agronomy: U Aung Khin

Division of Botany: U Pe Division of Chemistry: U Khin Win

(Radio Isotope)

- 2. Union of Burma Applied Research Institute (UBARI), Rangoon
- 3. Burma Medical Research Institute, Zafar Shah Road, Rangoon

Director: Dr. U Mya Tu

Department of Haematology

Department of Bacteriology

Department of Pharmacology

Department of Nutrition

4. Research Institute of Forestry, Pyinmana

4

おわりに現時点でのビルマ現地調査の可能性について、今回の旅行から得た印象をしるしておきたい。

いうまでもなく現地調査を行なうためにはまずその 国へ入国できることが第一条件である。つぎにすくな くとも調査に必要とする期間の滞在が認められ, 同時 に調査対象の存在する地点に接近する自由が与えられ なければならない。

ところで現状では、この第一条件を満たすに必要とするヴィザの取得がまずむずかしい。(24時間の滞在を認める「通過査証 (Transit Visa)」以外はすべて本国経伺が建前のようで、調査を目的とした入国はほとんど認められていないようだ。)

つぎにたとえ何等かの形で入国できたとしても,国 内旅行にはすべて事前の許可を必要とし,しかもたと えばマンダレーへ行くのでさえ申請は出発15日前に受 理されなければならない。

さらに旅行許可が与えられたと仮定しても,治安上 の理由から自由な通行はおそらく都市周辺とハイウエ ーに限定されるであろうことが予想される。

こうした状況下にあっては、センターがこれまでタイおよびマレイシアで試みた村落定着調査などはほとんど不可能であるといえよう。

文化省,教育省を訪問した際,わたくしはビルマに 留学生を含む研究者を派遣することの可能性について 質問したが,そこで得られた回答は,(1)ビルマ語学, ビルマ文学,ビルマ史等ラングーンに滞在して研究で きる分野であれば可能であろう,(2)この場合でも日本 国外務省一大使館一ビルマ外務省という外交チャンネ ルを通じてアプローチしてもらいたい,ということで あった。

開放経済の繁栄を謳歌し、巷に外国製品の氾濫しているバンコクからラングーンに来てまず思い起されたことは、戦争末期によく使われた「物資不足」ということばである。 Ne Win 将軍の外遊をひとつの契機として、経済統制が一部緩和され、食糧品など国内産の農林水産品の一部が自由に市場に出廻るようになったと言われるが、商店の店先を飾る品物はまだまだきわめて乏しいといわなければならない。ボールペン、マジックインキなどという、バンコクでは露店で投売りされているような品物さえ、ここでは得難い貴重品に属する。

アナクロニズムとさえ思われる「鎖国」を断行して、 ただひたすらに社会主義国家建設に邁進するビルマに とって、現在はまさに「非常時」なのだとわたくしは 思った。 (1966年12月31日 バンコクにて)

附 記

本文にも記したように、今回の旅行では高瀬侍郎大 使をはじめ在ビルマ日本大使館の館員各位、とくに田 中義具書記官、武田道郎書記官、吉野元之助書記官に は格別の御面倒をおかけした。また川原崎教授御夫妻 の御厚情も忘れることはできない。記してお礼にかえ たいと思う。

欧米におけるカレン族文献調査の旅

飯 島 茂

タイ国村落調査計画の一環として、西北部のメーホンソーン県で8カ月にわたってカレン族の第2回調査がおこなわれた。その後わたくしは、昨年の8月3日の夜にバンコクを出発して、ロンドンに向った。この旅行の目的は、岩村忍所長の御斡旋により、アジア財団からの寛大な援助がえられたので、イギリスとアメリカで3カ月にわたって、カレン族関係の文献や資料を収集するためである。

途中日航のジェット機がインド上空でエンジンの故障をおこして、カルカッタにひきかえすといったおまけもあったけれども、長途の旅を無事におえて、現地時間の翌4日の正午頃元気にロンドン空港に到着することができた。

飛行機のタラップから一歩出ると、北国のつめたい風が骨までしみ通る。これはいったいなんという気候なのだ。ロンドンがいくらヨーロッパの北部にあるといっても、いまは8月、盛夏ではないか。 それなのに、空港の寒暖計は 20°C あたりをさしている。昨日までのバンコクの気温にくらべると、10°C 以上も違うのである。これでは*寒く*感じるのも無理はない。空港からダウン・タウンへ向うリムジンのなかから、夏だというのに合服やスプリング・コートを着て町を行きかう人々を眺めながら、洋服の故郷を知る。この風土的な条件をいっさい考慮にいれないで、セビロを日本の暑い夏や熱帯の国々に持ちこんでいるわれわれは、よほどどうかしているのだろう。

このようなとりとめもない事を考えているうちに、 車はホテルに着く。早速旅装を解くと、ホテルからは ど近い大英博物館に行くことにする。 途中で "Sir, could you kindly show me the way to the British Museum?" と、 中学校で教えてもらって以来 このかた一度も使ったことのない当地風の英語で道を 尋ねる。*アイト・ブロックス、オーヴェー*といいな がら左の方をさし示す。早口のロンドンなまりは聞き とりにくい。答のくりかえしを頼むと、かれはさらに 早口に *アイト・ブロックス、オーヴァー、サー*を くりかえす。わたくしはそれを口のなかで二、三回反 芻する。そうだ、*アイト・ブロックス、オーヴァー* とは *エイト・ブロックス、オーヴァー* のことなの である。

このカクニーをつぶやきながら、しみじみと異国に 米た思いをあらためてかみしめる。さっきの人が教え てくれたように、8丁も行くと大英博物館の前に出 る。マルクスが資本論を書いた所にふさわしく、この 建物は重厚な雰囲気に包まれている。

まず受付に行って、図書室の入場証を発行してもらう。アジア財団からもらった紹介状のおかげで、イギリスの図書館や大学などではずいぶん助かった。この国は伝統的にクラブのような *排他的* な制度を発達させた国だけに、わたくしのような外国人や新参者にはいささか取り付きにくい面のある所である。

しかしながら、紹介状を入手すると(日本のように 簡単には書いてくれないけれども)、 この国の人が他 人を受け入れるのに構えている10ぐらいの障害物を、 自動的に5つぐらいは飛び越えられる。かくして、わ たくしは大英博物館における文献調査を順調に開始す ることができた。

よく知られているように、ロンドンの宿は朝食つきである。わたくしの泊っていた所でも、それは例外ではない。毎朝、オートミルやトーストとベーコン・エッグスの変りばえのしない食事を紅茶でのどに流しこむと、いそいそと大英博物館に向う。目と鼻の先の距離ではあるが、それでも9時の開館よりも早く着くこ



写真1 水稲の収穫をするカレン族の女

とが多い。だが、これはわたくし1人だけではないよ うである。かなりの数の常連が毎朝顔を合わせる。ひ とつにはかれらが1日中暮す図書室で良い席を取りた いという気持から、早く来るのだろうけれども、同時 にここにはよその図書館にない *なにか があるから ではないだろうか。わたくしも長期間にわたってタイ 国北部の山岳地帯で、水牛の数をかぞえたりなどして 暮してきたために、 すっかり重症の知的飢餓状態にお ちいっていたのだろう。たちまちこの "なにか"のと りこになってしまい、大英博物館ではいつになく動勉 に仕事をする。このような例はほかにも意外に多いよ うだ。常連のアメリカ人の歴史学者は「わたくしの国 にもずいぶん良い図書館があるけれども, 今までこん なに雰囲気の良い、わたくしをシビレ (intoxicate) させた所はなかった」と述懐していたのがたいへんに 印象的であった。



写真2 大英博物館の入口

たっぷりとした皮張りの 机と 椅子に 本拠を構えると、カーボン紙のついた申し込み用紙に1冊ずつ著者名、題名、発行年月日、整理番号、自分の名前、机番号を書き入れて、窓口に提出しておく。またリザーヴしてある本ならば、古いカードの写しだけを窓口に出す。そうすると、30分もしないうちに金髪の女の子が机の上に山と本を置いていってくれる。ここには貸出しの冊数の制限がないので、いつも百年物の本を机に山積しておくことができるのは嬉しい。

アメリカの人気のすくない図書館にくらべると、ここは労働賃金が安いせいか、いつもふんだんに係員がいて、サーヴィスがたいへんにゆきとどいている。これはひとつにはイギリスにおける研究者の地位の高さを示しているのではなかろうか。 大英博物館に限ら

ず, どこに 行っても 仕事に 関しては 大事にしてもらい, 恐縮する。

到着当時はたいへんに苦痛であったロンドンの *寒 さ"にもしだいになれる。そうすると人は勝手なもの で、寒い所の方が人間の頭脳労働には適しているので はないかと思うようになる。熱帯においては、エァー ・コンディッションがないと、よほど風通しのよい所 でない限り, 本を前にして机に二, 三時間もむかって いることは、あまり楽ではない。これを1週間も続け ると、へばってくることはしばしばである。それにひ きかえて、ここの自然環境は文化的環境とともに、研 究生活になんと好適なのだろう。加えて、前述のよう に、わたくしは知的飢餓症にかかっていたために、週 日は開館の朝の9時から夜の9時まで大英博物館で過 ごし, すこしも苦にならなかった。そのうえ, ここに はすばらしいアトラクションもある。仕事に疲れれば 地下にある喫茶室に行き、紅茶を飲んで、帰りがけに は陳列室に行く。そこでは見事なドンソン・ドラムや ロセッタ・ストーンを見て、頭の休養をとることがで きる。こんなにぜいたくな文献調査は、世界中どこに いってもできないだろう。

とにかく、大英博物館における好条件のおかげで、 仕事は意外にはかどり、カレン族の民族誌や歴史関係 の文献資料だけでも、30点以上も見つけることができ た。これはひとえに中央図書室の監督官である Mr. D.T. Roger の御助力のたまものである。

カレン族関係の資料については、タイ国にいた時に 外国人研究者から、かなり悲観的な見通しを聞かされ ていただけに、幸い先の良さにわたくしはいささか気 を良くしたのである。

このように大英博物館の仕事が一段落すると、わたくしは仕事の本拠を、近くのロンドン大学のSchool of Oriental and African Studies に移すことにする。ここでは事務次長の Mr. Bracken や副ライブレリアンの Mr. B.C. Bloomfield 氏の御援助で、手続きはすべて順調に進む。そして、大学本部から歩いて数分の所にあるトッテンハム 通り 図書館分室に 通い出す。ここには東アジアならびに東南アジア関係の図書資料が集められている。東南アジアの係りをしているMr. Allen Lodge はケンブリッジ大学の出身で、たいへん親切な人であった。そのうえ、ここは公開書架なので、ひじょうに能率的で、10日ぐらいの間に30点

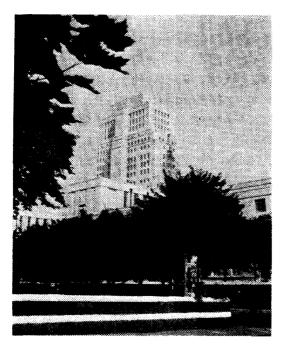


写真3 ロンドン大学の本部

ほどの資料や図書が集った。

このほか、ロンドン大学では夏休みにもかかわらず Mr. Bracken のおかげで、東南アジア・島嶼学科の科 長である Professor Eugènie J. A. Henderson と Professor Hla Pe, ならびに Reader の Mr. Stewart Simmonds にもお目にかかれた。 なかでも、 Professor Henderson は5年ほど前に行かれた臼井 二尚、 棚瀬襄爾、 本岡武の三先生のミッションのことをよく覚えておられ、その後の京都大学東南アジア研究センターの発展をたいへん喜んでくださった。

また人類学・社会学科では科長の Professor Christoph von Fürer-Haimendorf と Reader の Dr. Michael Mendelson にお目にかかれた。なかでも、Professor Fürer-Haimendorf は夏休みを過ごされたウインから、客員教授としてメキシコに行かれる途中、3日だけロンドンに立ち寄られた御多忙のなかを、初対面のわたくしに一晩をさいてくださったのにはひどく感激した。同教授に、わたくしが英文で今までに発表した論文を三つさしあげると、全部に目を通して、いろいろと御意見を聞かせてくださった。良く知られているように、Professor Fürer-Haimendorfはアジア大陸の山地民研究については世界的権威だけに、この個人ゼミナールはたいへんに示唆に富み、今後の研究に有益であった。

その後,残された期間にはインディア・オフィス,

王立人類学研究所,王立アジア協会,オクスフォード 大学などの図書館で仕事をしたけれども,すでに大英 博物館とロンドン大学で数十点以上の文献や資料を集 めてしまっているので,かなりの重複があり,期待し たほどの成果をあげることはできなかった。

このなかで、資料の点からいうと、インディア・オフィスは圧巻であった。とりわけ、インドやパキスタン関係のものは無限といってよいほど豊富である。しかし、残念なことにカレン族の文献資料になると、かれらの領域がビルマの中心部を離れていて、植民地としては経済的重要性がすくなかったために、記録になるような資料が数的にも質的にも他の地域にくらべると、かなりおとっているように思われる。

とはいっても、ロンドンは英領を中心にしたアジア 関係の文献資料の宝庫である。カレン族関係でも、1 カ月半の短期間に70点以上を集めることができた。そ のために、ゼロックスやマイクロ・フィルム代に追わ れて、内地から送金を受けたにもかかわらず、ロンド ンでは完全に破産してしまった。別れの時イギリス人 の友人はそれを"Happy bankruptcy"と呼んで、 ビールで乾杯をしてくれたのである。そのため、パリーに立ち寄った際には、当時フランスに滞在中の相良 惟一教授(京都大学教育学部)にお金を借りる破目に なってしまった。そのおかげで、わたくしはとにかく ニューヨークに渡ることができた。

アジア財団の配慮で、旅費の半分をニューヨークで 受け取ることになっていたために、わたくしはここで 一息つく。そのせいもあってか、数年前に初めて来た 時にはたいへんに異国情緒を感じたニューヨークも、 こんど来てみると、なにか東京に帰って来たような気

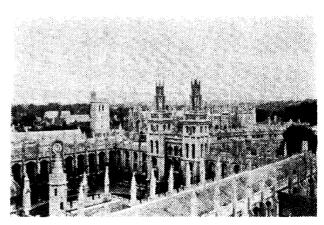


写真4 オクスフォード大学

安さすら感じる。だが、なんといっても物価が高いので、ミッショナリー関係の図書館を見ただけでニュー へヴンに向う。

ニューへヴンでは HRAF に Dr. Frank LeBar をたずね,タイ国北部における山地民研究について意見を交換する。さらに、同氏のお世話でエール大学の図書館でカレン族の文献を探したが、一、二点を除いてはあまり見るべきものがなかった。

その後、イサカのコーネル大学に行き、仕事をする。ここではタイ国北部で Lahu 族の調査に従事していた Delmos Jones 君が博士論文を執筆中の忙しい日程をさいて、親身になって面倒を見てくれる。おかげで、短時間の滞在にもかかわらず、貴重な資料や文献数点に目を通すことができた。そのなかでも二つの dissertation は、今後の研究にたいへんに役に立つと思う。ひとつは Hackett、William Dunn(1953): "The Pa-o People of the Shan State, Union of Burma," Unpublished Ph.D. Dissertation, Cornell Univ. pp. vii, 736 と他は Truxton, Addison S. (1958): "The Integration of the Karen People of Burma and Thailand into their Respective National Cultures," Unpublished Master's Thesis, Cornell Univ. pp. ix, 123 である。

イサカからわたくしはワシントン D.C. に飛ぶ。イサカではすでに紅葉も終ろうとしていたので、わたくしは寒さにふるえあがっていた。しかし、アメリカはやはり大きい。ワシントンまで来ると、林は色づき始めたところで、その暖い気候にわたくしは蘇生の思いであった。それに、ワシントンはいつ来ても美しい首

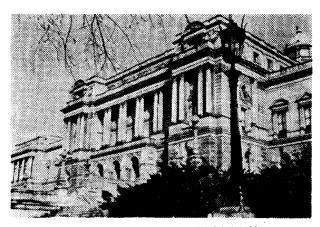


写真5 ワシントンの国会図書館 (アメリカ文化センター提供)

府である。

ここにある国会図書館の文献調査は、わたくしにとっていわば今回のアメリカ訪問の山であり、これが終ると西部の大学で一、二の仕事が残るだけになる。

アメリカの図書館の良いところは、すべてがオープン・システムであることだ。入館手続きなどの面倒さがないので、わたくしは付属ビルディングの2階にCecil Hobbs 氏を直接たずねる。 同氏は東南アジア課の課長で、たいへんなビルマ通である。戦前はビルマにおいてミッショナリーの事務関係の仕事をしていたので、カレン族についても一言持っている。おかげで国会図書館における仕事はずいぶんはかどった。今まで集めた資料と重複しない文献類だけでも、30点に近い本や論文を見つけることができ、その大部分をマイクロ・フィルムやゼロックスとして入手することができたのは収穫であった。

このようにして、アメリカ東海岸での仕事をおえたわたくしは、ジェット機でサンフランシスコに飛び、バークレーのカリフォルニア大学の図書館も当ってみた。しかし、カレン族関係の物ではあまり見るべき資料は見当らなかった。

最後にオレゴン州のユージンに行き、オレゴン大学 人類学部に Professor Theodore Stern をたずね た。同教授はビルマにおけるチン族の研究とタイ国西 部におけるカレン族の調査をされたベテランなので、 お目にかかってずいぶん勉強になり、得るところが大 きかった。

以上, イギリスとアメリカにおけるカレン族の文献 調査をふりかえってみて, 気がついたことを二, 三述 べて, 筆を置くことにしよう。

わたくしはタイ国でカレン族を調査したので、タイ国のカレン族に関する資料集めに力をいれたのであるが、その数はきわめて少なかった。これと反対に、ビルマにおけるカレン族の文献は当初予想した数よりもはるかに多かった。その第1の理由は今さらいうまでもなく、ビルマにおいては総人口2,000万人中カレン族はその1割以上をしめ、カレン州やカヤ州の2州を形成するほど重要な民族集団であること。第2の理由はタイ国が歴史的に独立国であったために、外国の植民地官吏や宣教師による記録が他の東南アジア諸国にくらべて、極度に少ないことである。

つぎに, イギリスとアメリカの図書館を大把みに比

較しよう。カレン族関係の文献資料に限っても、大英博物館にしるロンドン大学にしても、19世紀以来のミッション関係の記録を中心に植民地の役人の書いた物まで含めると、古い文献が豊富に保存されていた。それにたいして、ワシントンの国会図書館のコレクションなどには、あまり時代物はなく、もっぱら新しい資料が集められていた。しかし、最近の物なら新聞にいたるまで実に良く整理されていた。

最後に文献調査に関する技術的問題について触れて みることにしよう。

両国の図書館は全体としてひじょうに良く整備され ていて、司書の担当者が優秀なうえにたいへん親切で あった。そのため、文献調査であまり困ったことはな かった。しかし、仕事をしている間にいちばん閉口し たのは, あまり古くも新しくもない物のゼロックスや マイクロ・フィルムを入手することであった。イギリ スとアメリカでは多少異なるけれども、著者の死後大 体50年もすると著作権は消滅するので、古い本や報告 書を複製することは問題ない。また近年に発行された 本などの場合ならば新刊がいつでも本屋で入手できる ので,一番割安である。ところが,この両者の中間ぐ らいの本や資料を手に入れるのにはほとほと手を焼い た。なかでも、とくに太平洋戦争中やその直後に出版 された物で、当時の客観情勢のために発行部数が少な かったり、内地にほとんど入っていない文献などには たいへん困った。ゼロックスやマイクロ・フィルムで 入手するのに, いちいち出版社から書面による許可を もらわなければならなかった。しかも、それらの出版 社はしばしばどこかに移転したり、なかにはつぶれて しまっているのもある。

著作権の保護はたしかに大切なことであり、欧米の司書の方々が合法精神に富んでいることは尊敬に値いする。しかしながら、営利を目的としない学術研究にたいしては、このわずらわしさがなんとかならないものであろうか。

メナム河流域平野の地質調査

高 谷 好 一

1 地質調査にきて

「メナム・デルタの発達史」というのが、わたくしの研究題目であります。もう少しくわしくもうしますと、メナム河とその支流ぞいに発達するセントラル・バレー内の若い地層がいつごろ、どういう材料で形成され、そこにどうした過去の環境が秘められているかを調べるのが目的であります。具体的な作業といたしましては、主として河川ぞいに見られる崖を克明に観察してまわり、必要なところでは砂なり、粘土なりのサンプルを採取するというものであります。行動範囲は地図で示しましたとおりであり、概算で 600 km×150km、採取サンプルは約 100 kg 程度かと思われま

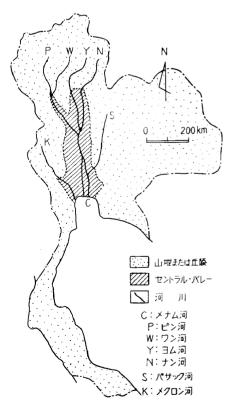


図1 メナム河とセントラル・バレー

す。

ところで、わたくしは、この調査をチュラロンコン 大学内に基地をおいておこなっているわけであります が、以下、その概況をごく簡単にお知らせしたいとぞ んじます。

2 11月から野外踏査が可能となる

当地にまいります前、わたくしはチュラロンコン大学地質学教室の Beeser 教授に手紙を出しました。先方からは12月になったらフィールド・サーベーが可能であるという返事がまいりました。たしかに、12月が近づきますと、それまでバンコクに待機していたフィールドワーカー達がいっせいに現場に出かけます。

しかし、今回のわたくしの経験では11月にはいると 野外踏査は可能なようでした。バンコク周辺では雨期 らしい規則的な雨は10月10日ぐらいまで続きました。 それから、17日頃と月末にまたひと雨ありましたが、 それ以後はほとんど本格的な雨をみていません。どう やら10月中旬以後空はかわきだしたようです。

洪水のひきはそれより少しおくれたようです。10月中頃には、まだ田舎道の小高い所で次の乾期まで待避している車を多く見かけました。この頃幹線道路以外は水びたしとまではゆかないまでも、泥んこでモータラブルではなかったわけです。

しかし、11月中旬になると、メナム中流部では、もうあちこちで足場を組んだ舟つき場を見かけました。 水位の増減の激しい間は、このあたりの川筋では筏式 の舟つき場しか見られません。足場を組んだ舟つき場 はあきらかに水位がもう乾期のそれに近づいたことを

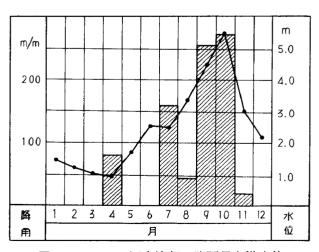


図2 メクロン河中流部の降雨量と洪水位



写真1 12月にはいると水のひいた崖の 下が急ごしらえの野菜畠になり ます。 (ナン河にて)

意味するものなのでしょう。グラフはメクロン河中流部にもうけられた測候所で測定された1964年中の降雨と河川の水位を示したものです(1964 Hydrologic Data, National Energy Authority)。 水にかんするかぎり、どうやら11月には踏査が可能なようであります。

しかし、調査の最適期はやはり、12、1、203 カ月のようであります。この期間にはバンコクでさえ、ジャンパーが店先に並べられるというのですから、いくらかは涼しいというものなのでしょう。すくなくとも、タイの学者の間では、フィールド・シーズンといえば、この3 カ月をさすものと思っている人達がだいぶいるようです。

ともあれ、わたくし自身は11月にはいると本格的な 踏査をはじめました。そして、その月のおわりには急 にあちこちで、ラテライト舗装道路の洗たく板けずり が巨大なモーターグレーダーで始められたのに驚かさ れました。

3 1日の運転資金160バーツ

さきにもうしましたように、調査範囲は広いので調査にあたっては機動性のある態勢をかためることが必要であります。わたくしはジープを購入し、それに身のまわり品、調査用具、サンプルの一切を積みこんで、いつどこにでも移動できるようにいたしました。ジープそのものをねぐらにはしないが、倉庫ないしは物置きの役目をするようにしたわけです。結局、わたくしは、荷物の大部分をかかえることによって、長期にわたり、転々と地方の旅館を渡り歩ける態勢をしい

たわけであります。この原則にたちまして、とにかく 个も調査を続行中でありますが、下の数字はその場合 の必要経費であります。ジープなどに対する最初の設 備投資をのぞいたその後の一日の基本的な運転資金と もうせましょう。

ガ゛	ソリコ	ノ代	50バーツ
修	理	代	20バーツ
宿	泊	料	50バーツ
食	事	代	40バーツ
	——— 計		160バーツ

ガソリン代 50 バーツというのは 2 バーツ/リットルのガソリンを日に25リットル使うという計算であります。別に、なにぶんにも田舎道と車の老齢のために月600 バーツの修理費が現実に必要となっております。なお、ちなみにもうしあげますと、古ジープは1957年Rebuilt の中型 Willys でありまして、購入費とその後のオーバー・ホールに合計18,000バーツを投じております。

次に宿ですが、これは地方の県庁所在地程度の町での最高クラスの値段であります。最高ともうしましても、エア・コンの部屋ではございません。 シャワー (湯は出ない)、トイレ、扇風機、ときに電話つき程度の部屋であります。この程度ですと、ときどき話に聞きます、シーツが汚なくて眠れなかったなどというようなことはまずございません。ただし、たいていの宿では、テーブル用の電気スタンドがございません。この点整理にはちょっと不つごうであります。

食事はタイ人が外食を常としていることが大変幸いしております。わたくしは、かつて当地でベントウを持ち歩いたことがありません。とにかく、どんな小さな部落でもかならず何か食べものがえられます。たいていは米のメシとメン類の両方が、もっと小さい部落で最悪の場合でも、生の油であげたバナナなら得られます。この種の現地食を中心にするかぎり、タイ・コーヒーやコーラ類などの清涼飲料を暑いさかりに数本飲み、夕食はちょっとぜいたくをしたとしても40バーツで十分のようであります。

4 ジープ以外ののりもの

わたくしがジープを選びました理由はもちろんその 馬力の強さにあるわけでありますが、これともうひと つ、田舎ではどの車種よりもジープが多く使用されて おり、故障の場合、修理と部品の調達が容易だからであります。ジープの占める比率は田舎に行くほど大きくなりますが、幹線道路以外でなら、5台に1台ぐらいの割合ではないかと感じております。

それはともかく、調査をおこなっておりますうちに、ジープでさえ使用不可能なところに時々ぶつかります。こんな時には、よく次のようなのりものを利用いたしております。ここで併記いたしました値段はチャーターを原則としたものであります。なおまた、たいていは距離料金ですが調査の場合、これは不つごうであります。したがって、わたくし自身は時間ぎめでやとうことにいたしております。

a. モーターボート

もともとは河と運河の乗合として作られたもので、20人のりぐらいの大型舟。験足舟としてはほとんどこれが唯一のものですから、水路によって距離をかせぐ時には、これにかぎります。船頭づきで1時間30バーツ程度。

b. 小 舟

本来の用途は家庭用の自転車といったところ。わたくし自身は対岸に渡るだけのためによく使います。 2 人から3人のりの小舟です。職業としての渡しでないから値段はきまっていません。往復で1バーツ支払うことにしております。

c. サムロー

足ぶみの三輪車。中型トランクぐらいの荷物ならつめます。1時間10バーツぐらい。

d. 自転車

どこにでもあるというものではありません。 サムロ

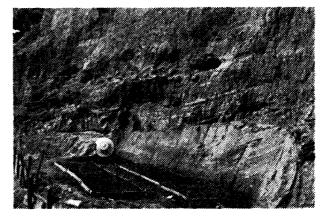


写真2 崖にはみごとな地層があらわれます。 これが調査の対象です。(ナン河にて)

ーも通行不能なような細い田舎道に稀にあります。客席は荷台。大きな荷物はもちろんダメ。1時間10バーツ程度。炎天下の田んぱの中の一本道を20~30km 走ることも可能です。ただし、時にはおりて歩かねばなりません。運転手が自転車をかついで小川を渡るようなことがあるからです。

このほか、もちろん、レギュラー・サービスの交通 機関が多くあります。大型バス、マイクロ・バス(田舎専用)、乗合タクシー、乗合モーター・ボート、渡 し。

調査地点が河岸の崖だとか、切割りのようなへんぴな所ではなくて、町から町、村から村への移動だけなら、もちろんこの種の定期便が十分利用可能ですし、また格安につくわけであります。そして路線そのものは予想以上に小さな部落にまではいり、また回数も多くあります。

5 地図類について

ところで、わたくしはガイドをやとっているわけではありません。また、そういつも協力者がえられるわけでもありません。したがって、調査にはもちろん、たんに移動のためにも正確な地図がどうしても必要であります。この意味で、わたくし自身、現在もっともひんぱんに利用しているものは次の3種の地形図と道路図であります。

a. 1/250,000 地形図

1957年頃, U.S. Army によって製作されたもの。 等高線間隔 100m, 補助等高線 50m。ローマ字使用。 7 色刷り。 1 枚の大きさ, 全体の感じとも日本の 1/ 200,000 地形図に酷似。一般店頭にはないが, Survey Department に申込めば個人でも購入できる。 1 枚 7 バーツ50サタン。

b. 1/50,000 地形図

1959~60年頃、U.S. Army によって製作されたもの。等高線間隔 20m。補助等高線 10m。ローマ字,タイ字併記。5 色刷り。一般個人は購入できない。オフィシアルな用途が確認された場合には販売される。1 枚 5 バーツ。

c. 1/40,000 航空写真

1953年頃 U.S. Army によって撮影されたもの。 個人による購入は不可能。ただし依頼すれば、大学、 官庁などで見せてもらえる。公務用の値段は1枚10バ ーツ。

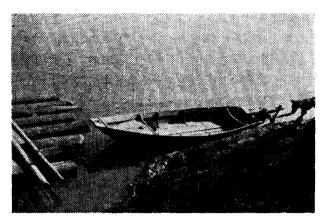


写真3 こんな小舟でよく対岸の崖を見 にゆきます。 (ヨム河にて)

d. 1/1,000,000 道路図

雨期あけになると、この年の道路状況を加味した新しい道路図がでる。国道のみしか記入していないが、アスファルト、コンクリート、アスファルト・コンクリート、ラテライト、砕石、砂利、普通土、建設中のものの8種に分類してあって、7色刷り。主要都市間の距離が明記してある。タイ字使用。High Way Department で個人でも購入可能。1枚15バーツで4枚つづり、計60バーツ。

6 文房具など

最後に踏査そのものとは直接関係がありませんが、 記録あるいは整理用の材料としては次のような状態で あります。

a. 写 真

フィルム

黒 白 36枚どり(日 本 製)20バーツ カラー 20枚どり(アメリカ製)47バーツ

現 像

黒 白 5 バーツ

引のばし (ポストカードサイズ)

黒 白 1 バーツカラー 6 バーツ

かなりの田舎にはいりましても、フィルムは手には いるようであります。ただし、値段のほうは約2割が た高くなるようです。

b. 文献複写

ゼロックス, ヒシラピッドのたぐいは, あまりポピュラーではありません。各教室にそなわっている日本の大学の状態を期待することはできません。むしろ一

般には使用困難と考えたほうがよいかとぞんじます。

したがって文献複写には、マイクロ・フィルムが無難かと思われます。ただし、CHの用紙もそうポピュラーではありません。

c. トレース, 青焼

大判のロール・トレーシング・ペーパーは手に入れにくいものでありますが、バンコクでなら二、三の店がおいております。ドイツ製、110 cm 巾、20 m もので60バーツ。

青焼の各種大きさによる値段はぞんじません。わたくしの場合は 1/50,000 地形図 2 枚つづり (約 100cm $\times 30$ cm)のものをよく焼きますが 1 枚 4 バーツ50サタンです。

ところで、ただ今、もっとも困っておりますことは、図面入れの筒が見つからないことです。さがしかたが悪いのかも知れませんが、とにかく、今は手製の筒で代用しております。

d. カード類

わたくし自身フィールド・ノートがわりにポストカード・サイズの厚紙を使用しておりますが、これはバンコクで買ったものです。しかし、多くの種類を求めることは不可能なようであります。特にパンチ・カードを使用する場合には、ここではスペアーを得ることは不可能かと思われます。いずれにしろ、カード・システムを採用されているかたは、全部持参なさった方が安全かと思われます。

その他の文房具たとえば、雑記帳、ボールペン、マジック・インク、セクション・ペーパー、タイプ用紙、ポリエチレン袋のたぐいはきわめて豊富です。値段もそれほど高くはないようであります。

あとがき

わたくしは東南アジア研究センターから10カ月の予定で調査に派遣されているのでありますが、同時にチュラロンコン大学理学部リサーチ・フェローの特権をも有しております。いわば、もっとも調査のやりやすい身分的保証をえているわけであります。

わたくしはこの好運をチェラロンコン大学と京都大学の両方にいつも深く感謝しているわけですが、とにかくこの種の身分的保証は絶大な威力をもっているものであります。たとえば、わたくしは踏査の途中でであうチェック・ポイントでいつもそれをはっきりと感じます。

またなによりもことに書きました調査の現況それ自体がチュラ大学内に一部屋が与えられているという事実の上に可能になっているのでありましょう。倉庫としてのジープともうしましたが、参考文献やデーター類はもちろん大学においておりますし、採取したサンプルも一単位の旅行がおわるごとに運びこんでおります。雨期の間はほとんど毎日この部屋で大きな地図のトレースや航空写真の解析をいたしました。たまには友人がたずねて来て歓談することもあります。ようするに、わたくしは、今、ここに我が家をもっているわけであります。教室の同輩達は自分達の仲間として、データーを出してくれ、調査の進行を心配してくれます。本当はこの好運が基本的な前提条件ではないかと考えているのです。

いよいよ、フィールド・シーズンもたけなわですが、今、わたくしはこの上の好運として、実際にいっしょにフィールドのやれる現地の共同研究者の誕生をなんとかして実現させたいと努力しているところであります。 (1966年12月15日)